

共同研究【若手】● 演じる人・モノ・身体—芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点（2014-2016）

2014年度より開始された本研究は、ダンスや演劇や音楽などの芸能における人とモノの関わりに焦点化するものである。

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与されたりする側面だけでなく、人がモノに感情や行為を引き出されたり拒まれたりする側面、そして人とモノの相互的な働きかけによって出来事が生成する過程に注目している。その中では、人とモノの1対1の関係だけでなく、モノを媒介にしながらつながる、より広い人と人、人とモノのネットワークを捉える視点も生まれた。また、人とモノの動的な関わりに対して、モノや身体の物質性がどのように作用するのかという問いも重要性をおびた。こういったテーマに向き合い、モノ、人とモノの関わり、そしてその物質性に注目する研究をここではマテリアリティの人類学と呼びたい。

本研究は、こうしたマテリアリティの人類学の関心を芸能の研究に差し入れ、新たな視座を探求する。芸能は、人間が生み出すものであるが、そこには、楽器や大道具や衣装や仮面といったさまざまなモノが介在している。芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察することが第1の目的となる。

たとえば、楽器の音色に感化されて新たなメロディーが生まれ、衣装によって身体の新たな動きが引き出されたりと、モノによって人の動きや創造／想像力が触発される現象がみられる。また、仮面の損傷や、音響機材の誤作動など、モノによって引き起こされる人間の側の予期していなかった出来事もある。自然環境や都市環境に影響されながら生まれる演技や音楽もあるであろう。さらに、芸能に使われるモノの製作や流通に関わる人々の働きも、芸能という営みを支えている。本研究は、上演中やその前後に続く人とモノの相互作用に目を向け、新たな芸能観を創出することを目指す。その中では人間の身体はもちろんのこと、照明、録音・録画機器や再生メディアといった存在も視野に入ってくるであろう。

それにくわえて、本研究の2つ目の目的は、芸能の分析を通じて、音や動きや物語の中で展開する人とモノの関わり

特徴を考察し、マテリアリティの人類学を進展させることである。マテリアリティの人類学は、明確な輪郭と自由な意思を持つ独立した近代的自己像を疑問に付してきた。別稿（吉田 2011）でも述べたように、そうした既存の人間観を乗り越えようとする試みは、芸能の研究や実践の中にもみ取ることができる。おもに演劇を想定しながらシェクナーは以下のように述べている。

パフォーマンスは演技者同士の、演技者と台本との、演技者と台本と環境との、そして演技者と台本と環境と観客の間の「私ではないが・・・私でなくもないもの」のフィールドに、「立ち上がる」。(シェクナー 1998: 64)



上演中の演者は仮面の表情に導かれ、その霊的な力に身を任せるように演技する（2011年10月、インドネシア、バリ島、吉田ゆか子撮影）。

主体と客体には還元できない人間のあり方は、演劇の世界においても重要な課題であり続けた。さらに仮面劇や人形劇の分野では、そこに人形や仮面といったモノが重要な要素として介入しており、その中では、自己と他者の関係、人とモノの連続性や、生と死の境界などが重要なテーマとして存在している（e.g. Coldiron 2004; Posner et al. 2014）。芸能上演中には、楽

器に命を吹きこんだり、人形と1つになったり、仮面とともに役柄になったり、といった日常生活ではあまりみられない、人とモノの独特な関係性が結ばれるからである。

他方、上演以外の日常へと目を転じれば、人は人形や仮面や楽器を手入れしたり、売買したり、贈与したり、保管したりもする。そこには人とモノとのまた別の関わりがある。本研究では、そういった日常と、上演という非日常的な地平を、行ったり来たりする人とモノの間関係性の動態も考察する。そしてこれらのことから、新たな身体観や人間観を提示することを目指したい。

マテリアリティの人類学は、視覚だけではなく、触覚を介した人とモノとの関わりも取り上げてきたという功績がある。しかし一方で、聴覚に関してはあまり論じられてこなかった。本研究の楽器演奏を対象とした分析は、音を介した人とモノと環境の関わりという新たな側面に光を当てる。

なお、現在は映像技術や配信ネットワークの発達により、芸能がますますモノから離れ情報やイメージとして拡散している。それに対し、本研究は、リアルな手触りと身体性、そして重量感を伴うモノを通じた経験を記述し、その重要性を照らし出す。本研究は、今後の人類学において、こういった拡散する情報やイメージの次元と、具体的にミクロな人とモノの相互作用の次元をいかに扱うのか、というきわめて

現在の問いへも貢献しうるものである。

本研究では、芸能をいわゆる民俗的なものに限っていない。本研究の代表者を務めている筆者は、バリ島の宗教儀礼と深く関わる芸能を専門としているが、メンバーの扱うパフォーマンスのジャンルは多様である。たとえば、身体の障害をかかえる踊り手のコンテンポラリー・ダンスや、デジタルデータで音楽を再生するアフリカのショー・パフォーマンスといった幅広いジャンルを対象とする研究者が参加している。その意味では、本研究の想定する芸能とは、英語でパフォーマンス・アーツと呼ばれる領域に近い。ただし「アート」の語感には収まりきれない、奉納芸のようなジャンルも含んでいる。

本研究で扱われるモノも多様である。欧米の先行研究においては、操り人形や仮面などがパフォーマンス・オブジェクト (performing object 以下 PO と表記) と呼ばれることがある。PO とは典型的には「人間や動物や精霊の物質的なイメージで、語りやダイナミックなパフォーマンスの中で創造、展示、操作される」(Proschan 1983:4) ような一連のモノである。



音響機材の誤作動等によって演者が予期していなかった上演展開となることもある (2009年12月、ウガンダ、カンバラ県、大門碧撮影)。

そして現在の研究では、かならずしも人や動物や精霊のイメージでなくとも、パフォーマンスにおいて独立した命を与えられているようなさまざまなモノも PO と呼ぶという (Posner et al. 2014: 3)。たとえば、人形ではなく靴や上着や本など日用品を操って物語をつくる即興劇 (object theater) があるが、そこで用いられるモノもみな PO と呼ぶことができる。本研究で我々が扱うモノは、こうした PO だけでなく、より

広い範囲をカバーしている。そこには、仮面や人形にくわえ、楽器、化粧品、デジタル音響機器、車椅子などが含まれる。また場合によっては、音や、音を運ぶ媒体となる風をモノとして扱うことも考えられる。モノというテーマのもとに、芸能に現れるこのような多様な存在について、共通の地平で議論できる点は、本研究の特徴の1つである。そしてまた我々の関心は、上演を取り囲む物理的環境にも向けられている。生態人類学者や、都市の音環境を考察してきた民族音楽学者も参加している。くわえて、障害学からのメンバーも迎え、身体の制御不可能な部分といった不確定な要素も含みこんだ動的な芸能の側面に光を当てる点も、本研究の意義である。

現地で芸能を実践したり、映像を用いて調査しているメンバーも多い。また博物館展示に関わるメンバーも複数含まれている。芸能という、上演とともに消えてしまう1回限りのどこか捉えどころのない営みを、いかに民族誌的に記述できるか、そして実技や映像や展示といった手法をどのように生かすか、人類学への方法論的な貢献につながる議論も期待される。

【参考文献】

- Coldiron, Margaret 2004. *Trance and Transformation of the Actor in Japanese Noh and Balinese Masked Dance-Drama*. Lewiston: The Edwin Mellen Press.
- Posner, Dasia N., John Bell & Claudia Orenstein 2014. *The Routledge Companion to Puppetry and Material Performance*. Oxfordshire & New York: Routledge.
- Proschan, Frank 1983. The Semiotic Study of Puppets, Masks, and Performing Objects. *Semiotica* 47(1): 3-44.
- シェクナー、リチャード 1998 『パフォーマンス研究—演劇と文化人類学の出会うところ』高橋雄一郎訳 人文書院。
- 吉田ゆか子 2011 「仮の面と仮の胴—バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1): 11-32。

よしだ ゆかこ

日本学術振興会 特別研究員 PD。専門は文化人類学。著作に、「仮の面と仮の胴—バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」(『文化人類学』76(1) 2011年)、「仮面が芸能を育む—バリ島トベン舞踊劇に注目して」(床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学』京都大学出版会 2011年)など。



都市の風景や音環境も芸能を構成する一部となっている (2012年1月、香港、辻本香子撮影)。